

Title	西[遊]夢録(十二)
Author(s)	瀧川, 規一
Citation	地球 (1928), 10(3): 214-218
Issue Date	1928-09-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/183489">http://hdl.handle.net/2433/183489</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 西遊夢錄

(十二)

## 瀧川規一

## 蘇國の部

## (XIII) ホーリールド宮殿とメリ女皇。(1)

僧院から宮殿に變じて以來、輪喚の美を備へたこのホーリールド宮殿は蘇國の歴史と運命を共にし今日に至るまで華かな歡樂の場面と流血の慘を見せた物凄い光景とな幾度繰り返したことであらう。蘇國の歴史を繙く者は常にこの宮殿を背景にして各時代の葛藤を心に描く。就中吾等文學を専攻にする者にとつて常に興味を唆るものは蘇國の女皇メリ (Mary Queen of Scots) の奇しき生涯と、その初期を過ごされたホーリールド宮の生活とである。

抑も女皇メリは人の知るが如くエリザベス女皇と従姉妹の關係である。エリザベス女皇は英蘭の黄金時代の女皇として凡ゆる方面に於て治蹟の赫耀たるものがあり、今日に至るまで英蘭人は何か催し物をなす毎にエリザベス女皇を引き出すのが慣習になつてゐる。然るに女皇メリはその政治的生涯を通じて始終陰暗なる末路を豫示するが如き劃策陰謀が身邊を

圍繞して居る。兩女皇の傳記や秘史の讀者は醜女エリザベス女皇の老獪な日常の行動に人物としての冷さを感じ、美姬であつたメリ女皇の暢達な性格とどこまでも女性である點とに同情と親しみとを感ずるのである。婦徳の如何についてはエリザベス女皇と雖も英蘭人の誇る程に無垢の貞操を押し通したか否やは知る人ぞ知るのである。

またそれが左程の誇にも當らぬ。女皇メリに絡まる怪聞に至つては餘りに天地が狭く餘りに陽になり過ぎた嫌がある。メリ女皇がロツホレーヴン湖 (Loch Lven) の一小島上に幽閉され、小島より逃れ出でて英蘭に走り、エリザベス女皇の命令のままに殆ど十九ヶ年の幽閉の後遂に一五八七年の二月八日に斷頭臺上の露と消え失せるに至るまでの悲慘な運命に讀者人は同情する。ホーリールド宮内に於ける女皇の派手な生活を想ふ異國の旅人等は宮殿拜觀に益々興味を覺える。後世人は當時の人々の如き不純な精神をもたない。毀譽褒貶已が欲するまでである。愛憎親疏もまた誰に遠慮も要らぬ。吾々は醜女と見て居りながらエ女皇の美容を稱へた詩人エドマンド・スペンサ程の癖目をもたぬ。テムズの河遊びに行幸さ

れたエ女皇の聖徳に感泣して泣き潰した爲めに、河の北日魚は片眼を失つてゐると云つた詩人程に非科學的な阿諛をなす必要がない。メリ女皇の美しくあつたこと、親切な温かみのある日常の行動、女皇に繞るの艶話、當時の蘇國政界の風雲など史家が傳へるままに受諾して生きたメリ女皇を想像して見たい。

十六世紀の英蘇兩國は宗教問題で天下は鼎の湧くが如き有様であつた。英蘭は結果から見て云ふならば妥協性を既に發揮して新教とも舊教ともつかぬ所謂英國々教 (Church of England) なるものを確立してゐた。爲めに英蘭の宗教界は鎮靜してゐたがその點に於て蘇國は立ち遅れてゐた。女皇メリが女皇としてホールード宮に入つた頃は新舊兩教の紛争が既に劇しき時であつた。メリ女皇が宮殿に住まれる以前に宮殿附屬のア・チャーチ (Abbey Church) は新教化して舊教の形式を一掃してゐた。そこへ舊教徒である佛蘭西の軍隊が女皇と共に渡つて來た。軍人等が公開の禮拜に參列して笑聲を發し私語を志するので説教の聲が聞えないと云つたやうな有様であつた。爲めに折角出來かけて居た妥協氣分も消え失せて各派の軋轢を益烈しくした。宮殿は女皇入御以前に修繕や増築を施されて女皇の御住居として體裁を一變した佛蘭西の華麗壯嚴な諸宮殿を見てゐる者もこの宮殿を見て國に相應せぬ程に立派な建物だ、Certes un beau bâtiment, qui ne tient rien du pajs)とお世辭を云つた程に見事に出來上つた。女皇入御を悦んだ市民は毎夜宮殿の女皇の御部屋の

窓下に立ちて音楽を奏して歡迎の意を表した。女皇もそれが御氣に召して幾夜も續けばよいと覺悟された。佛蘭西の文化に比すると蘇國は當時猶未開國である。佛國の洗練された音楽を聴き馴れた耳にはこの時の蘇樂は未だ粗音であつたであらう三絃若くは四絃の單純なる樂器フツドル (Fiddle) やレバツク (Lute) をもち出して調和せぬ騒音を送り剩へ五六百人の咽喉から泣き聲の調子で讚美歌を絞り出した。國民の熱誠はさることながら安眠の妨けには充分であつたであらうと思はれる。

然るに女皇御到着後の最初の日曜には今までの熱誠なる國民の歡迎の聲が急變して怒りの聲となつた。女皇は自ら舊教國に成人されたに拘らず蘇國の新教徒の臣民に對しては寛容な態度をもつて臨むと以前から云はれてゐた「年の更ると共に宗教を變へるなどは夢にも思へぬが、自己の信仰をもつて國民を拘束もしなければさりとて國民も亦妾を拘束しないことを望む」と云ふのが女皇の真意であつた。然るに女皇の尊い寛容な態度は十六世紀の基督教徒には望めぬことでありまた理解の出來ぬことであつた。兼ねての約束通り宮殿内で秘かに舊教の儀式を行はれたことが、新教派の人々の耳に入り儀式を司つた僧侶を殺せと人々は怒り狂うた。その次の日曜には宗教改革の先鋒であるノツグス (Knock) は説教壇上から公然これを攻撃した「神聖なる宗教を撲滅する爲めに領土の如何なる部分にも上陸する武裝せる一萬の敵よりも一回の舊教の法會の方が恐ろしい」と公言した。

引き續いてジョン・ノックスと女皇とは宮殿内に於て有名な會見をなした。今まで威風凛々した新教の首領等、(Heads of the Congregation)は一度メリ女皇に面接すると女皇の魅力に富む言動の爲めに或者は苛酷な態度を柔げる者さへあつた。然るにジョン・ノックスは女皇の優しく温き言説に接しても背き心根を柔げ得なかつた。彼は羅馬教の教義を排斥する酷烈さを益加へた。女皇は三週間の後に國內を巡幸された。ノックスは怒つて、「多くの都市は女皇に對して偶像崇拜をなし汚濁された」とて嘆詞を切つた。

巡幸を終へて還御されると女皇は華かな生活を宮殿内に送られるやうになつた。それは今まで戦禍に疲弊した國情に不相應な生活であつた。女皇の夫ドーフアンの薨去一年祭を催された時には槍騎で環を衝く競技などがあり而も参加者の一半は女装をした。女皇自らも狩獵に加はり鷹狩をされる。ゴルフをされる。ボール(Pall)と呼ばれた今日のクロツクに似た遊戲をされる。撞球をやられる。骰子や双六を弄ばれると云つた風に蘇國の蠻風に似もつかぬ派手な遣方を國民は見せつけられた。議會に臨まれた際の華麗の服装を見て、聖職の人々は侮蔑されたと思つた。ノックスの如きはこれを見て、「婦人の鼻持ちならぬ自負心であり虚榮心だ」と宣言した。市井の人民は「神様あの麗はしき顔を救ひ給へ」と云つて祈つた。時には男装をして市街をお忍びで出られた。それがまた口さがなき人々の舌を益々繁く動かめあめあめ噂を立てさした。

これが佛蘭西宮廷の日常生活の延長であるとするならば當時のルーネツサンスの風潮及び精神は斯うであつたらうと蘇國人は眉を擡めた。女皇は晩餐後讀書をされる。教師について教を乞はれる。書齋には書籍をもつて充たされる。これもルーネツサンスの風潮の一つであつた。日常生活のお相手には一人の佛蘭西の老女と、四人の侍女が居る。四人の侍女は女皇と同年齡であり、女皇と同じ名でメリ(Mary)と呼び、女皇と一緒に佛蘭西に日を送つて來た娘達である。四人のメリは或は刺繍をなし或は音楽を奏し或は朗讀をなして宮殿内に日を送つた。今日には見る影もなく荒れ果てて居るが、晴天には庭園に立ち出で、單調なる日程の變化を作つた。

扱て宮廷内の靜穩なる生活は永続しなかつた。舊教の豪族が叛旗を翻した。女皇自ら陣頭に立つて叛軍を擊破された。女皇即位後の最初の議會に臨む爲めにトルブース Tolboothに臨幸された。行列のお伴には四人のメリが馬側に侍つてゐる。國王の權票を奉侍せる伯爵が居る。王冠を運ぶ公爵が居る。王劍奉侍の伯爵が居る。斯く威嚴を正して臨幸された議事堂の議員出入口には棺が蓋を開けたままに立てゝある。棺の内には纔に叛旗を翻した舊教徒の首領ハントリ伯(Thas Earl of Huntly)の死骸が立つて居る。議會はこの死屍に向つて罪の宣告をする。土地財産の沒收、紋章許可の取消、姓名記憶の抹殺、子孫の榮達差止は嚴重に云ひ渡される。最初の議會臨幸は實に不吉な臨幸であつた。

やがてホーリールド宮殿に於て女皇の光を曇らすべき事件

が續出する。

佛蘭西から一青年が來た。名をシャートラール(Chateaulard)と呼ぶ。美目清秀の青年であり、ロマンチックな性格を有し文學に嗜をもつてゐた。自然容易く女皇の寵を得た。女皇の缺點を云ふならば女皇として友情を他人に示さるるに當り餘りに不用意であつた。下賤なる青年に示された女皇の馴れ馴れしさに驚いた老臣もあつた程である。その友情親切は女皇にとつては全く他意なく眞に無邪氣なものではあつたであらうが、相手の青年には赦す可からざる犯罪を獎勵するに至つたのである。或時女皇が寢所に入られるとこの青年は寢臺の下に身を秘ませてゐた。翌朝このことを聞いて女皇は青年を放逐された。然るに同日女皇は他に行幸になると彼はまたも女皇の寢室に忍び込んだ。遂に彼は刑場の露となつて消え失せたが、當時の噂ではこの青年は佛蘭西のユークノー(Huguenot)一派の密使であつて舊教徒の女皇の身を危くせしめんとて遣はされたのだと信じられてゐた。

ホーリールド宮殿に女皇が入られてから二三年経つて女皇の結婚問題が起つて來た。この問題には廷臣も外交官等も種々頭を悩ました。斯う云ふ美しい若い婦人の寡婦生活は永續する筈がないと誰しも考へた。ノックスすら念頭に掛けて居た。凡ての人々はそれを話題にした。或者は女皇が西班牙の皇族を迎へられんことを欲した。或者は皇帝の兄弟を望んだ。或者はローバト・ダッドリ卿(Lord Robert Dudley)或者はネムール公(Duke de Nemours)を、或者はダーニリ卿

Lord Darley)を候補者に擧げた。宮殿内にあつて世間の取沙汰を聞かれた女皇は面白く思はれたことであらう。日夜針仕事をせる四人のメリと共に女皇は繰り返へし／＼この問題を話しあつて居られる。宮門外でノックスは西班牙との結婚に反對して怒聲をふり擧げて説教をやつてゐる。女皇はノックスを宮殿内に呼び入れ「若しノックスが非難すべきことを發見したならば秘かに妾を責めて呉れ、態々公衆の面前で嘲笑の的となるやうに妾を槍玉にあげないやうにして呉れ」と涙を流してノックスに懇願された。ノックスはそんな優しい言葉に耳を籍すやうな男ではなかつた。「神の子の涕泣を悦ばぬが、緘黙してもつて良心を損ね、國家を裏切ることが出来ぬ」とノックスは答へた。女皇も怒を發せられ「御前を退け」と命じられた。ノックスはそんなこと位でひるむやうな男ではない。彼は控室に一時間も留つて輕卒なる官女等を叱りつけて彼等の無思慮な生活や派手な服裝を責めた。ノックスの斯うした言動は奇矯に過ぎて今日極東人の常識では將に狂人に等しいと思へぬのである。「お美しい貴女達よ、汝等のこの陽氣な派手な生活が永續し、終に天國に入る時にもこの派手な服裝を纏うて行けるものならお前達の生活は悦ばしいものである。然し死と云ふ惡漢はお前達が望まうが望まいが否應なしに出て来る。死がお前等を捕へた時には見るも汚らばしい蛆虫がお前達のこの肉體に生いて、この美しい柔かい肉體は決して美しさと軟かさとを止めないであらう。この馬鹿な靈魂は非常に弱くて金銀の装飾も眞珠も寶石も其

時は身につけ得ないであらう」と云ふやうな説教ともつかず罵倒ともつかぬことをノツクスは口走つた。貴顯を提へて面罵したことを到る處で吹聴し歩く所謂豫言者の群の狂言動も斯くやあらんと思はれて笑止千萬である。もと同窓である宗教家が公衛で友人に向つて「汝汚れたる罪人よ悔ひ改めよ」として祈禱をなし出入の諸人を手古摺らせた挿話は相手か公人として相當の位地にあるだけに面白味がある。今ノツクスが宮廷前で怒聲をふり揚げ殿内で女皇はじめ官女等を手古摺らせた三百年の昔を今日旅行者は現場で想像する。ノツクスの家も間近にある。ノツクスが説教をなし廻つて奇蹟もあらはしたと云はるる處も此處彼處にある。宗教に熱した狂者等はノツクスに雷同する。愈事件は深刻化して行く。

女皇メリが東部地方巡幸の留守中に宮殿内に於て皇族一家の爲めに舊教の儀式が催された今日の眼から見ればさしたる

こともないが、これは女皇の面前に於てのみ許されると云ふ約束に背いてゐたのであつた。遂に「同朋」と稱する新教の信徒等は二人の指揮者に率ゐられて虎狼の如く宮殿の禮拜堂に亂入し禮拜をさまたげた。女皇還御を待つて宮殿闖入者は審問される。ノツクスは暴徒の行動及び主張に賛成したばかりでなく多くの信者を集めて、裁判官を威嚇せんとした。今日では想像も及ばぬ暴舉ではあるが、十六世紀では屢々見る社會的現象であつた。ノツクスは女皇及び樞密顧問會議の前に招喚され暴舉を責められた。その時ノツクスは女皇に向つて偶像崇拜の宗教を棄てることを逆に命じた。彼は無罪となつて放免された。この現象は説教壇が王位よりも重く且つ有力なることを證明するものであり、また裁判官は説教者の群に對して何等の力をもたぬことを示した。爲めに今後益紛糾し行く四圍の狀況は斯くて如何なる結果を産んだであらうか

### ○東京高等師範學校教授佐藤傳藏氏の逝去

月廿六日彼地に於て遂に易装せられた。享年五十九、誠に痛惜に堪へない、同氏は熊本縣土族で、明治廿八年東京帝國大學地質學科卒業後、人類學教室に助手として故坪井教授の下に數年間、人類學の研究に従事せられ、明治卅一年東京高等師範學校教授に就任せられ、其後農商務技師を兼ね、大正十三年以來東京帝國大學講師をも兼ねられ、爾來三十餘年、専ら育英と地質學、礦物學の研究、各地の地質調査に没頭盡瘁せらるること一日の如く、夙に令名あり、其効績は頗る偉大である、又著述には山崎博士と共著の大日本地誌の他、大礦物學、岩石地質學、地質學提要等あり、多年の蘊蓄造詣は、大に今後の開闢なる活躍を期待要望せられて居たのに、今卒然其計に接して、大に慙き深く惜まぬ人は無い。